

2023年6月11日 教会創立記念礼拝(聖霊降臨節 第3主日)礼拝メッセージ

「捕まって自由となる」

水谷憲牧師

聖書 使徒言行録 2章 37-47節

クリスチャンであること、または洗礼を受けてクリスチャンになることは、世間一般的に見て、どうも不自由なイメージ、何か自分を縛り付けて自ら不自由になることを選択するようなイメージがあるのかもしれませんが。クリスチャンでない人々からは、「1週間仕事で日曜日くらいゆっくり休んだり、遊びに行ったりしたいのに、わざわざ教会に行かないといけないのか」とか、「クリスチャンは右の頬を打たれたら左の頬も打たせてやらなあかんねんな」とか、「酒やタバコは飲んで大丈夫なんとか」、他にも「けんかしてはいけない」「怒ってはいけない」とか、「クリスチャンは肉を食べたらいけないんだよね」と聞かれたという実話などもあります。私も昔、九州の片田舎で小さな学習塾の講師をしていた頃、当時の中学生の生徒から「先生って、クリシタンなんやろ?」と尋ねられたこともありました。「クリシタンて、まあ、そうと言えばそうなんだけど、別に世間から隠れて、命懸けで信仰守っているみたいな、そんなものすごいものでもないで?」みたいな話をしたこともあり、とにかくクリスチャンでない人たちからすると、クリスチャンというのはそんなふうになんとずれたイメージであったりもするわけですが、そのようなイメージを持たれていたりするようです。私が神学生の頃には、ある時実家に帰ると、父親が私の親指にはめていた指輪を見て「お前、これから牧師になるんやったら、そんな華美なファッションはやめれ」と言ったものでした。いやなにも指輪から首飾りからジャラジャラと着けていた訳でもなく、たまたま右手の親指に一つ、昔夜店で買ったファッションリングをしていただけなんです。まあ、どの辺からが華美なのか、といった基準から父親と私では違っていたこともあるんですけど、どうも私の両親もクリスチャンというものに、質素で清く正しいといったお決まりのイメージしか持っていなかったようです。

クリスチャンというものが、本当にそのような数々のイメージ通りのものなのであれば、確かに、そりゃあそんなの私もなりたくない。別に贅沢したいとか、いい暮らししたいとかそんなこと思っているわけではないのですが、あまりにも「あれはしてはいけない、これもいけない」というものが多すぎると、確かに窮屈すぎてしんどいわな、クリスチャンというものが本当にそんな風にしか見えないのであれば、そりゃあクリスチャン人口も増えんわな、と思ってしまいます。私も、もう少し楽しげに見えるクリスチャンライフを送っていかないといけないのかな、子どもたちにも「クリスチ

「ヤンって楽しいー！ なってよかったー！」っていう姿をもっと見せていかないといけないのかな、と考えさせられたりもしています。

さて、本日の聖書の箇所は、イエスが天に帰られて、残された使徒たちに聖霊が下ったときに、ペトロが使徒を代表してイエスがメシアであることを証した、その時の話です。37節には、人々はこれを聞いて大いに心を打たれた、とあります。36節で要約されているペトロの話、つまり「あなた方が十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです」という話を聞いて心を打たれたんです。新共同訳聖書のもう一つ前のバージョン、口語訳の聖書においてこの箇所は「人々はこれを聞いて強く心を刺され」と訳されています。心を刺されたんですね。グサー！とかズキー！とかいう感じでしょうか。イエスの十字架における死というものは、あなた方に関係のないものではない。それどころか、イエスを十字架につけて殺したのは、まさにあなた方なのだ。イエスはなぜ殺されなければならなかったのか。イエスが、どんな悪い事をしたというのか。イエスは、当時の社会にあって低く見られていた者や、ぞんざいに扱われていた者、爪弾きにされていた者にこそ真っ先に目を留め、声をかけ、手を差し伸べ、心身ともに傷をいやしておられたのだ。イエスは、病人や、子ども、女性など、彼らを押さえつける言葉ばかりの律法、その律法中心の社会を変えようとされたのだ。彼ら彼女らを、そのような窮屈な社会から解放しようとされたのだ。それというのも、一人一人が愛すべき、大事な存在なんだよ、という神のメッセージを伝えるためだったからだ。そのイエスを、律法学者や祭司長たちは、ピラトを使って十字架につけて殺した。しかしあなた方も、無実のイエスを十字架につけろと要求し、あるいはイエスが殺されるのを黙って見ていたのだ。あなた方は、律法を知らない者たちの手を借りて、イエスを十字架につけて殺したのだ。結果的にイエスさまは復活されたけれども、あなた方がイエスを殺したことは、決して無かったことにはならないのだと。

ペトロのこの言葉は、イスラエルの人々に向けて話されたものでしたが、これは当然私たちに向けられたものでもあります。私たちは、イエスの死に直接関係があるという実感なんてもちろん持っていないのですが、私たち自身の日常の中で、誰かを押さえつけ、ないがしろにし、あるいは誰かの痛みを目をつぶってしまった経験がそれぞれ少なからずあるのではないのでしょうか。その「誰か」とはもしかすると、別の姿をとって私たちの前に立っておられたキリストだったかもしれないのに。その意味においては、私たちもイエスを十字架につけて殺してしまった者、見殺しにしまった者と同じなのかもしれません。

そして、そのような自分の罪に気付かされたとき、私たちはこのユダヤ人たちと同様「私たちはどうしたら良いのですか」と言わざるを得ない。ペトロは「悔い改め

なさい」と言っています。「悔い改める」とは「これまでの生き方を変える」ということです。その延長線上に洗礼があります。洗礼は、これまでの生き方を変えたいという悔い改めがあつてのものです。それは決して強制ではなく、これまでのしょもない自分から、新しい自分に生まれ変わりたい!という積極的な決意表明であるわけです。そして私たちは、イエス・キリストの名によってそのような生き方を変える機会を与えられており、その機会は、ペトロの言うように、私たちにも、私たちの子どもにも、遠くにいる全ての人にも、つまり、神が招いて下さる者なら誰にでも与えられています。ただ、いわゆる「医者 of のいない丈夫な人」に対しては、神の招きも効果がないのかもしれませんが。「医者 of のいない丈夫な人」とはつまり、自分の罪に気付いていない人、自分が正しいと思っている人。きっとその人には、神が招いて下さっていたとしても、その言葉は無意味であつたり、あるいは聞こえなかつたりするのかもしれませんが。

このように、私たちがそれぞれの罪に気付かされ、神の招きに応えて悔い改め、生き方を変えよう、イエスに従つてより良く生きようとすることは、キリスト教界ではよく「神様に捕らえられた」というような言い方をします。「捕らえられた」といった言い方からすると、ちょっと窮屈で不自由な印象なのですが、しかし実際は、私たちが神に捕らわれることによって、今までの価値観や考え方を脱ぎ捨て、神さま、キリストを中心とした価値観、考え方をまとつた新しい自由な生き方、新しいいのちを私たちはいただいているんですね。キリストに捕らえられはしたけれども、私たちがその代わりに本当の自由を教えていただいたんです。ですからちつとも窮屈ではない。

現代は一見して本当に自由な世の中になりました。生活水準も上がり、言論にも思想にも、職業選択などにも自由が与えられています。私たちは好きな人と結婚し、好きな者を食べ、好きな物を買ひ、好きな所に住むことができます。しかし、イエスの時代に比べて豊かで自由になつたように見えるけれども、その実は様々な価値観に囚われ、心が自由になれていない人もたくさんいるように見えます。ペトロは「邪悪なこの時代から救われなさい」と言っています。「邪悪な」とは「ひずみきつた」「曲がつた」「ひねくれた」「不義の」「不正の」といった意味でもあります。ひずみきつたこの時代から、あるいは不義・不正にまみれたこの社会から、あなたは救われなさい、自由になりなさいとペトロは言っているんですね。まさにこの私たちの生きる現代にも通じます。この日、ペトロの話聞いた者たちが 3000 人ほど仲間に加つたといひます。本当に 3000 人も一度に洗礼を受けたのかどうかは疑わしいですが、でもそのくらい救われたいと願つた人たち、自由になりたいと願つた人たちがいたということなんでしょう。みな救われるために、自由になるために

キリスト者となったんです。

44 節以下には「信者たちは皆一つになって、全ての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心を持って一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意をよせられた」とあります。最近、大学などでも寄宿舍や共同のアパート、部屋の壁もトイレの壁もめっちゃ薄いみたいな学生寮などは少なくなり、こぎれいな個室のアパートが増えました。まあ善し悪しですけども、何かを他人と共有するとか、みんなで日常的に集まって食事をするということが少なくなってきたのではないのでしょうか。何なら、家族でそろって食事をするということが少なくなっているのかもしれませんが。そういう状況を覚えながら比べてみたとき、この信者たちの姿はとても豊かな共同体の姿であるようにも思えてきます。

全ての物を共有するという事は、相手を思いやるということです。神殿に参り、神を賛美するという姿からは、感謝の心がうかがえます。私たちが様々な囚われから解放され救われるには、まず自分が一人で生きているのではないことへの気付きと感謝、そして自由に生きてきたつもりであった自分が実は自由なんかではなかったことへの気付きが必要であり、そこに気付かせてくれるのが、無条件で私たちの罪を許し、存在を受け入れてくれる十字架のキリストであり、あらゆるものを共に分かち合うことのできる仲間の存在なのではないのでしょうか。47 節に「こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え」とありますが、そのように十字架のイエスによって私たちに与えられた福音を、私たちが互いに分かち合い広げることによって、きっと神の国も広がって行くのでしょう。そして「民衆全体から好意を寄せられた」ともあるように、そうやって救われ自由になった私たちの歩みは、知らず知らずのうちに人をひきつけ、イエスに従う私たちの群れをさらに大きなものとしていくことになるはずで。

キリスト教界の中にも、残念ながら、誰かを押しえついたり、障害したりするような不自由な構造はまだあるものの、私たちはイエス・キリストを通じて神様に捕らえられることによって、自分を縛っていた様々な囚われから解放されて自由になることができます。これからの私たちの歩みにおいても、使徒の伝えるイエスの教え、そして神様の私たちに対するメッセージを聖書に聴き、そして相互の交わり、食事を共にすること、神様に祈ることを大事にしていきながら、あらゆる囚われから自由になった私たちの生きた姿を見て「私もイエス様について行ってあの人みたいになりたいな」と、子どもたちに思ってもらえるような人になっていけたらと思います。